方　　面	自衛隊統合防災演習	（1面）
1 師 団	自衛隊統合防災演習	（2面）
12 旅 団	自衛隊統合防災演習	（3面）
1施設団	方面施設科職種合同訓練	（4面）
関東補処	自衛隊統合防災演習	（4面）
東 混 団	初級陸曹特技課程	（5面）

あづま

令和７年８月２５日　第１０８７号

総監統率方針「強靭な東部方面隊の創造」
総監要望事項「一隅を照らせ」

陸上自衛隊東部方面隊広報紙
発行所：方面総監部広報室
住　所：東京都練馬区大泉学園町
専用線：8-37-2446

首都直下地震への備え

07ＪＸＲ　対処能力を向上

方面隊は7月14日から18日までの間、令和7年度自衛隊統合防災演習（07ＪＸＲ）に参加し、陸災首都圏部隊としての任務を達成するとともに、大規模震災発生時における方面隊としての対処能力の向上を図った。

本事業は首都直下型地震発災時の対処に必要な自衛隊の統合運用能力、地方公共団体等との連携強化、日米共同対処能力等の向上を目的として、防衛省のみならず関係省庁、地方公共団体等と連携して実施したものである。

総監部における幕僚活動

現地調整所（都庁）における自治体との調整

首都圏における災害対応の中心的役割を担う東部方面隊は、上級部隊、隷下部隊、増援部隊等と連携した指揮幕僚活動はもとより、現地対策本部等における1都3県との連携、協定に基づく企業等と連携した実動訓練等を実施し、指揮幕僚活動能力の向上及び民間力の活用を含めた活動基盤の拡充を図ることで、運用の実効性を向上することができた。

今回の演習で得た成果を、今後の災害派遣活動等へ生かしていくとともに、首都直下型地震対処において、現場レベルの活動や各種調整が期待される東部方面隊として、引き続き地域との連携強化を推進していくことで、災害対処に係る万全の態勢を整備していく所存である。関連―❷❸❹面

防衛技官　各種研修等で知識・技能の修得図る

方面隊は新規採用者集合教育を6月9日から12日までの間、中堅事務官等集合訓練を6月10日から13日までの間、実施し関東補給処及び駐屯地業務隊から18人の防衛技官が参加した。

本研修は行政職(二)及び医療職(二)・(三)の中堅事務官等及び新規採用者を対象として行われ、中堅事務官等に対しては知識・技能を修得させて資質向上を図ることを目的として、新規採用者に対しては職責を自覚させ、基礎的知識を修得させることを目的として行われた。

中堅事務官等は採用者確保及び離職防止に係る課題にグループで取り組み、問題解決能力の向上を図った。また新規採用者は事務官等の地位・役割、文書管理、情報保証等の講義を通じて職責を自覚し、職務遂行に必要な基礎的知識を修得するとともに、新規採用者間の「同期の絆」を深めた。

朝霞駐屯地業務隊の研修では担当者から業務内容等について説明があり、参加者からは活発に質問が上がっていた。

参加者からは「自衛官と同じ使命感を持ち、防衛技官が駐屯地機能の維持管理を担っていることを内外によく知ってもらいたい」との声があった。

本研修が駐屯地における防衛技官の重要性を認識するとともに、防衛技官同士の連携強化の好機となった。

朝霞駐屯地業務隊の研修

関東地方整備局との情報連絡会

災害対応状況について協議も

方面隊は6月17日、国土交通省関東地方整備局との情報連絡会を実施した。国土交通省は河川、砂防や道路等の調査・計画・設計業務、現場業務、管理業務を日ごろ実施しており、大規模震災等の発生時は、被害状況の迅速な把握、被害の拡大防止、被災地の早期復旧等に対する技術的な支援を実施している。

方面隊は国土交通省関東地方整備局と「災害時等の情報交換に関する協定」を締結しており、その協定に基づき、発災時の情報共有や、交通の規制に関する各種対応措置等について日ごろから連携し、迅速な被災者の救助・救援のため尽力している。

今回の情報連絡会は年に一度、定例で実施しているもので災害時の効率的・効果的な対応に資する連携要領や、近年の災害対応状況について協議された。

また国土交通省関東地方整備局の災害対策室及びＣａｒ－ＳＡＴ（移動型衛星通信設備）の研修を実施し、発災時の河川、砂防や道路等把握要領の説明を受けた。

特に同省が保有するＣａｒ－ＳＡＴは、アンテナが衛星を自動追尾し、車両の走行中においてもリアルタイムで映像伝送が可能なシステムであり、荒天時でヘリコプターが飛行できない場合も車両により被災状況が迅速に把握できるとの説明を受けた。

方面隊は引き続き、国土交通省関東地方整備局との連携を強化していく。

Ｃａｒ－ＳＡＴ（移動型衛星通信設備）の研修

第８代方面隊最先任上級曹長に　小林准尉

見送りを受ける第７代最先任上級曹長
大久保准尉

前総監と記念撮影をする大久保准尉（左）小林准尉（右）

第８代最先任上級曹長に上番した小林准尉

方面隊は7月23日、朝霞駐屯地において東部方面隊最先任上級曹長交代行事を実施した。

第7代東部方面隊最先任上級曹長　大久保准尉は行事において在任間の感謝を述べた後、多くの隊員から盛大な見送りを受けた。大久保准尉は総監部付となり、8月1日付で教育訓練研究本部（目黒）へ異動し、今後は最先任上級曹長を目指す隊員の育成に当たることとなる。

大久保准尉はこれまで熱意溢れる指導により方面隊の任務遂行に寄与した。特に現地に赴くことを積極的に行い、陸曹・陸士の声を直接聞くなどして現場の声を総監に伝えていた。

そして新たに関東補給処最先任上級曹長　小林准尉が第8代東部方面隊最先任上級曹長として上番した。

小林准尉はこれまで第1戦車大隊最先任上級曹長、富士学校機甲科部最先任上級曹長等の要職を歴任している。

小林准尉は上番するに当たり「第8代東部方面隊最先任上級曹長に上番した小林です。この歴史と伝統ある東部方面隊の最先任上級曹長として勤務できることを大変誇りに感じています。私の役割は東部方面総監の統率を補佐し、現在から将来にわたり東部方面隊の各部隊の任務完遂に寄与することと考えております。それには現場隊員とのコミュニケーションと信頼関係が必要不可欠であります。大切な仲間たち（宝もの）の為にも精一杯頑張ります」と所信を述べた。

９月号に総監、１師団長、１２旅団長の離着任について掲載致します。

第１師団

07JXR

首都直下地震に備えた実効的演練

令和７年度自衛隊統合防災演習に参加

師団は7月14日から18日までの間、令和7年度自衛隊統合防災演習（07JXR）に参加し、首都直下地震の発災を想定した指揮所訓練及び実動訓練を通じて、災害対処能力の向上と関係機関との連携強化を図った。本演習は首都直下地震という未曾有の災害に対し、自衛隊が迅速かつ的確に対応し、国民の生命・財産の保全と首都機能の維持に貢献することを目的として行われ、被害想定地域を隊区とする師団はその中核部隊として、多方面にわたる活動を展開した。

陸災東京都現地調整所で自治体と調整を図る司令部ＬＯ

◆指揮所訓練における連携と情報の統合

指揮所訓練では、東京都庁に師団司令部の連絡官（ＬＯ）を派遣して、東方総監部が設置する陸災東京都現地調整所に調整要員を配置するとともに、さらに東方総監部にも師団から要員を派遣し、上級部隊・隷下部隊・関係自治体と密接に連携しながら、災害派遣における「情報収集・意思決定・部隊運用」の各フェーズを検証した。

また平素から災害時に至るまでの情報業務フローや一体的な運用要領の実効性の検証を行った。

加えて各自衛隊学校から派遣された増強幕僚の配置・連絡調整要員としての運用方法についても、司令部機能との適合性を確認した。

さらに、被災状況に応じた予備自衛官の投入時期や規模の見積もりなど、災害対応における部隊運用全体を多面的に検討するとともに、発災直後、師団各部隊からの各担任区へのＬＯ及びファスト・フォース（初動対処部隊）の派遣状況、他方面隊から増援される師・旅団との引継ぎ状況の把握等、計画に反映できる教訓が多く得られる指揮所訓練となった。

◆実動訓練における即応力と調整力の強化

7月14日には、東京都多摩地域において高速道路の緊急開口部を利用し、第34普通科連隊のＬＯ要員が高速道路に進入して、被災地へ向けて派遣される訓練を実施した。この際、中核給油地での給油を行い、災害時における迅速かつ持続的な展開能力を実証した。

7月16日には、第1普通科連隊及び第1偵察戦闘大隊が民生品の四輪バギーやスカイレンジャー（ドローン）を活用した訓練を実施。四輪バギーは悪路での機動性を活かして物資輸送や救助者の搬送に用いられ、スカイレンジャーは被害状況の把握や映像伝送に活用された。これらの装備の有用性を実証し、即自救援段階から生活支援段階に推移する状況での柔軟な運用方法が確認された。

7月17日には、余震の発生により避難所で負傷者が発生したとの想定のもと、東京都からの要請を受けて消防庁・東京ＤＭＡＴと連携した救護所を設置。第1後方支援連隊が中心となり、衛生隊員が東京ＤＭＡＴの医師・看護師と共同し、負傷者のトリアージ（重症度分類）や応急処置、さらに緊急搬送及び後送までを実施した。民間医療機関との連携を踏まえたリアルな演練となり、平時からの調整の重要性を再認識するものとなった。

緊急開口部を利用し高速道路に進入する34普連ＬＯ

バギーとドローンを活用し災害情報収集を行う1偵戦大

東京消防庁・東京ＤＭＡＴと連携し救護を行う1後支連

◆訓練参加隊員の声

訓練に参加した隊員は「四輪バギーの機動性を確認することができた。今回の訓練で得た知見をもとに、四輪バギーやドローンをどのように部隊で活用していくかを具体化し、さらに即応性を高めていきたい」と話す。また別の隊員は「自治体や医療機関と連携する中で、自衛隊の役割がより明確になった。今後も状況に即した柔軟な対応力を養いたい」と話した。

◆首都機能を守る〝盾〟として

今回の訓練を通じて師団は、災害対処における情報統合、意思決定、即応展開、連携調整といった一連の機能について、より実効性の高い知見と教訓を得ることができた。今後も首都直下地震のような大規模災害を念頭に置き、不断の訓練と関係機関との信頼関係の構築を続け「国民の安全と安心の確保」「首都機能の維持」に貢献していく。

第32戦闘団ＨＴＣ訓練で大奮闘

訓練成果を発揮して勇猛果敢に攻撃

横隊に展開し索敵を行う32普連

師団は6月21日から28日までの間、上富良野演習場で実施された令和7年度北海道訓練センター（ＨＴＣ）訓練第1次運営に、第32普通科連隊を基幹とし、東部方面航空隊を含む諸職種部隊を配属された第32戦闘団（戦闘団長 32普連長）が参加した。これにより指揮幕僚活動の評価及び戦闘の客観的・係数的な評価を受け、諸職種協同に必要な練度を向上させた。

ＨＴＣ訓練に先立ち、6月8日から14日までの間、32普連及び配属協同部隊はそれぞれの所在駐屯地から上富良野演習場まで長距離機動訓練を実施した。現地到着の翌日10日から、同演習場においてＨＴＣ訓練での勝利に向けた事前訓練を行い、17日に戦闘団は編成完結して、20日までの間で万全の訓練準備を整えた。

6月21日の状況開始から28日の状況終了までの間、敵1個戦闘団規模の部隊が防御する地域に対し、32戦闘団はＨＴＣ訓練に向けたＢＣＴＣ訓練（指揮所訓練）等の成果を遺憾なく発揮して攻撃し、所望の目的を達成し任務を完遂した。

師団が隊員自主募集で表彰

全国地本長等会議で2級賞状を受賞

6月10日及び11日の両日、令和7年度全国自衛隊地方協力本長等会議が九段会館テラスにおいて実施された。

本会議の冒頭に行われた、令和6年度隊員自主募集における顕著な成果を挙げた部隊等に対する表彰式において、師団は陸上幕僚長から「隊員自主募集優秀部隊」として2級賞状を授与された。

表彰式には師団長が出席し、森下陸上幕僚長から直接賞状が手渡された。また同じく第1普通科連隊も2級賞状の表彰を受ける栄誉に輝いた。

師団は厳しい募集環境が続く中にあっても、部隊・隊員が一丸となって募集業務に真摯に取り組み、継続的に成果を上げている。今回の表彰は、そうした地道な努力と団結の証であり、今後もより一層の成果が上げられるよう、そして共に働く仲間を増やすため募集業務を行っていく。

森下陸上幕僚長から直接賞状を受け取る師団長

相談しやすい職場環境の実現に向けて

師団部隊相談員養成訓練を実施

師団は6月17日から20日までの間、令和7年度第1回師団部隊相談員養成訓練を実施した。本訓練は各部隊における部隊相談員（予定者を含む）に対して、メンタルヘルス施策や傾聴技法、ストレス対処法などを教育し、部隊における相談窓口としての役割を担う隊員を養成することを目的としている。

傾聴技法の実習を行う隊員

訓練では「メンタルヘルス施策」「傾聴の基本技法」「各種ハラスメント対処」「個人的ストレス対処法（呼吸法等）」「組織的ストレス対処法（解除ミーティング等）」といった、実践的かつ体系的な内容が講義と実習を通じて行われた。

参加者からは「悩みを抱えた人への接し方が具体的に分かった」「まずは話を聴くことの大切さを学んだ」など、今後は部隊で相談しやすい雰囲気づくりや、メンタルヘルスに関する正しい知識の共有に取り組んでいきたいとの意欲が示された。

師団では、こうした訓練を通じて、隊員が心身ともに健康で安心して任務を遂行できる環境づくりに引き続き力を入れていく。

第12旅団

07JXR

空中機動力を最大限に活用

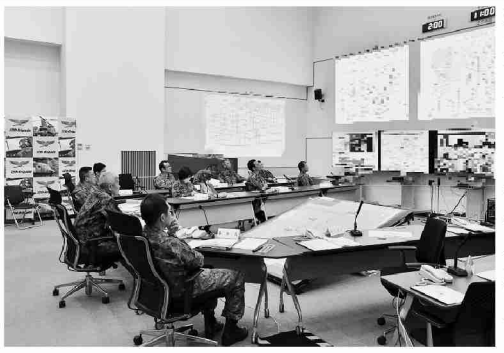
令和7年度自衛隊統合防災演習

旅団は7月14日から18日までの間、令和7年度自衛隊統合防災演習（07JXR）に参加した。この演習は首都直下地震における大規模災害を想定し、首都直下地震発災時の対処に必要な自衛隊の統合運用能力、関係省庁、地方公共団体等との連携強化等を目的として行われた。旅団はこの場を活用して首都直下地震対処計画におけるLO、FF及び即時救援部隊の機動展開要領、衛星通信等を使用した通信、上級部隊、隷下部隊と連携した指揮幕僚活動能力の維持・向上を図るとともに、計画の実効性向上を図った。また指揮所演習（CPX）と並行し、各種の実動訓練（FTX）を実施して初動対処の練度向上を図った。

CPXは都心南部直下地震における冬季の夕方で特性を踏まえた乾燥による火災の拡大、大雪による道路啓開の遅れ・機動展開の遅延、被災者の低体温症等を想定し、発災以降、司令部・各部隊は速やかに指揮所活動を開始し隊区内被害状況等の現況把握後、迅速な災害対処に資するため、場外離発着場に指定されているヘリポートを利用し、旅団として初めてとなる東京都内のLZ及び海上自衛隊下総基地を使用した空中機動作戦を実施した。

FTXは12旅団の空中機動能力を最大限に活用し、大田区のガス橋緑地公園、中央区の新月島公園等の場外離着陸場に航空機を降着させ、都市部での救助・支援活動が可能であることを実証するとともに、他機関の連携による統合対応力の向上を図った。

またガス橋緑地公園で航空機より卸下した高機動車・トレーラ、災害派遣関連装備品、オートバイの展示を実施し、関係機関等、多くの方に自衛隊の活動に対する理解を深めることができ、あらゆる事態に備えた体制強化に取り組むことができた。



指揮幕僚活動（旅団作戦室）

UH－60による偵察部隊の投入（新月島公園）

CH－47によるFFの展開（ガス橋緑地公園）

単車射撃する16式機動戦闘車

12偵戦大

迫力ある単射戦闘射撃

轟音とともに大地を震わせた

第12偵察戦闘大隊は7月9日から13日までの間、関山演習場において16式機動戦闘車（MCV）による単車戦闘射撃及び60ミリ迫撃砲の射撃訓練を実施した。

MCVの戦闘射撃訓練は一連の状況下において、車長の統制のもと乗員の相互連携により敵（標的）を撃破する実弾射撃訓練であり、射撃の精度、乗員の相互連携要領の向上を目的として実施した。特に車長の迅速な射撃指揮、砲手の正確な照準・撃発、操縦手の機動時の射撃に資する操縦及び装填手の安全・確実かつ迅速な装填技術等の各練度の向上を図った。

本訓練を通じて隊員個人の技術及び乗員連携の練度が着実に向上されていることを確認することができた。

また60ミリ迫撃砲射撃訓練では分隊長、砲手及び弾薬手の連携要領、安全確実な操砲、初弾の弾着から次弾以降の迅速確実な修正要領を演練した。

60ミリ迫撃砲もMCVと同時期に配備された火器であるが、貴重な実弾射撃訓練の場を最大限に生かして、迫撃砲分隊が高い練度を保持していることを確認した。

今後もMCV分隊、小銃分隊及び迫撃砲分隊が連携した訓練を実施し教訓や成果を反映させ、あらゆる事態に対処できる強靭な部隊を育成するとともに、能力向上に大隊一丸となって邁進していく。

防大3学年生の研修支援

未来の幹部自衛官育成に寄与

81式短距離地対空誘導弾車両に興味深々な防大生

旅団は7月2日から21日までの間、旅団隷下各普通科連隊において、防衛大3学年の陸上要員33人に対し、防衛大学校夏季定期訓練部隊実習を支援した。

当初、相馬原駐屯地において旅団長講話、装備品研修等が行われ、その後、連隊ごと精神教育、徒歩行進を含む普通科職種の各行動の研修・実習を行った。防大3学年の学生に対し、一連の実習を通して幹部自衛官の地位・役割及び部隊の実状を理解する有意義な機会を提供した。

12音

長野ドリームフェスティバル

暑さを吹き飛ばす音色

第12音楽隊は6月28日・29日の両日、千曲川信州の幸あんずホールにおいて長野地方協力本部創立70年記念行事支援を実施した。本行事においては「学生たちが吹奏楽を楽しみながら、演奏技術の向上を目指す」をコンセプトとし、28日は千曲市内中学校4校の吹奏楽部員に対し演奏指導を実施した。

また29日には12音が演奏を披露し、多彩な音色を響かせた。当日は32度という真夏日であったが、制服試着や屋外での装備品展示も、吹奏楽部の学生を中心に好評であった。演奏会に参加した学生からは、「演奏指導やホールでの発表という普段経験できない体験ができてよかったです」等の言葉があった。今後もさまざまなイベントで観衆を魅了していく。

マツケンサンバを披露する12音

サマキャンで魅力を発信

各種イベント支援開始

間近でみたCH－47

旅団は7月1日から8月31日までの間、令和7年度陸海空自衛隊サマー・フレンドシップキャンペーンを実施した。本キャンペーンは高校生・大学生等の夏休み期間に合わせて陸海空自衛隊が実施しているイベントの様々な機会を提供し、自衛隊の「実状」「魅力」「親しみやすさ」を発信するもの。各部隊は車両宣伝等により、学校等の通学路でキャンペーンを周知するとともに、各駐屯地見学では職場体験を中心として装備品展示、体験喫食等を実施した。自衛隊の魅力を深められる貴重なイベントをこれからも実施していく。

自衛官候補生修了式

第2普通科連隊（高田駐屯地）、第13普通科連隊（松本駐屯地）、第30普通科連隊（新発田駐屯地）及び第12後方支援隊（新町駐屯地）の各部隊が担任・実施していた自衛官候補生課程の修了式が、6月下旬に各駐屯地で行われた。各駐屯地で行われた修了式には、来賓や自候生らの家族が訪れ、自衛官候補生は、自衛官の基礎となる教育訓練を終え、見違えるように成長した姿を披露していた。

【30普連】同期の集合写真

【2普連】隊旗返還

【12後支】自信に溢れる敬礼

【13普連】家族と再開

第１施設団

方面施設科職種合同訓練

滑走路応急復旧能力を向上

施設団は6月23日から27日までの間、航空自衛隊入間基地において、令和7年度方面施設科職種合同訓練（滑走路応急復旧）を担任実施した。

本訓練の目的は、方面施設科部隊等に対して、滑走路応急復旧（小弾痕）の要領を教育・練成し、方面施設科部隊の能力向上を図るにある。

本訓練は第1施設団隷下の第306施設隊が担任部隊となり、団隷下部隊に加え、第1施設大隊、第12施設隊及び中央即応連隊施設中隊が訓練部隊として編成された。また研修部隊として、航空自衛隊中部航空施設隊、第1空挺団施設中隊、教育支援施設隊等が参加した。

訓練の実施に当たっては、進入路啓開に始まり、復旧範囲の決定、コンクリートの切断・破砕・除去、路盤の形成、コンクリートの生成から打設に至るまで、滑走路応急復旧の工程を段階的に練成した。また、滑走路の清掃から戦闘機の離陸に係る誘導灯の設置等について、意見を交換した。

訓練終盤の26日には、訓練担任官である第1施設団長や中部航空施設隊司令が視察に訪れ、隊員に激励を行うとともに、訓練成果を確認した。

最終日まで1件の事故も無く、方面施設科部隊の滑走路応急復旧能力は着実に向上し終了した。

油圧削岩機によるコンクリートの破砕

コンクリートカッターによる切断

路盤形成後の支持力測定

コンクリートの生成

コンクリートの打設

新隊員教育隊を開始

担任官は情熱と絆を要望

施設団は7月3日、古河駐屯地において、新隊員後期教育開始式を実施した。

本教育は第101施設器材隊が担任し、団内から選抜された要員によって教育隊を編成、万全の態勢を確立した。

開始式では担任官の第101施設器材隊長が訓示を述べた後、教育隊旗を手渡し、訓示では新隊員に対して要望事項を2つ述べた。

要望事項の1つ目は「情熱を持って教育に挑め」として、「教官、助教を信じて教育訓練に情熱を持って挑んでほしい」と述べた。要望事項の2つ目は「同期の絆を大切に」として、「共に厳しい訓練を乗り越える仲間との絆は、一生の財産となる。互いに支え合い、高め合う関係を築いてほしい」と述べた。

新隊員は「緊張しますが、早く慣れて頑張りたい」「同期と助け合いながら、一人前の自衛官になれるよう頑張ります」等の意気込みを話し、頼もしさを見せた。

施設団は彼らの成長を支え、見守りながら、自衛官としての識能と絆を育んでいく。

教育隊旗の授与

開始式の様子

関東補給処

統合防災演習に参加

指揮幕僚活動等を演練

関東処は7月14日から18日までの間、霞ヶ浦駐屯地及び各支処等所在駐屯地において令和7年度自衛隊統合防災演習に参加した。

本演習は首都直下型地震が発生した場合における指揮幕僚活動等について演練し、その能力の維持・向上及び計画の実効性向上を図ることを目的として行われた。

令和9年1月に首都直下地震が発災することを想定とし、補給本部改編後の態勢におけるバトルリズムに基づいた指揮幕僚活動及び東部方面隊等への補給整備支援を主要演練項目とし、関東処首都直下地震対処計画及び指揮所編成の実効性を検証した。

想定日時1月14日9時48分頃M7・3の地震が発生、関東処は直ちに第3種非常勤務態勢に移行、速やかに指揮所を開設、上級部隊や各部・各支処等及び関係自治体と連携して情報収集を実施した。

収集した情報はクロノロジーを利用してリアルタイムで共有を図るとともに処の輸送支援態勢や補給品の在庫確認など現況把握に務めた。

また発災後速やかに中央兵站基地（BMA）を開設し、全国からの補給品の集積を推進して支援態勢の確立を図った。

本演習により、じ後の統合訓練及びその他の隊務等において、反映・改善すべき事項について検証成果を獲得し、計画の作成及び支援要領の実効性向上のための資を得ることができた。

作戦会報の様子

発災後速やかに指揮所を立ち上げる隊員

霞ヶ浦駐屯地公式ホームページ
https://www.mod.go.jp/gsdf/eae/eadep

X(旧ツイッター)
フォロワー募集中!!

陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地@公式
@CampKasumigaura

サマキャンで募集広報

商業施設で装備品展示

7月1日から8月31日までの間、陸海空自衛隊が一体となってイベント等の機会を通して幅広い世代に対し自衛隊への興味・関心を振起することを目的として、サマー・フレンドシップキャンペーン（通称「サマキャン」）が行われている。これに伴い関東処広報班は7月1日、近隣高校の通学路を登校時間に合わせて小型トラックで走行しサマキャンの周知を図った。

小型トラックにはサマキャンの文字や茨城地本のマスコットキャラクター「にゃっとら」の絵を貼り付け、学生を始め多くの人の目を引いた。5日には土浦イオンにおいて装備品展示を実施し、幅広い世代に対して自衛隊をアピールすることができた。

近隣高校での周知活動

商業施設で装備品展示

富士弾

爆破訓練を実施

富士弾薬出張所は7月3日、東富士演習場第3爆破場において、不発弾処理実爆訓練を実施した。

本訓練は弾薬特技者として練度の向上を図るとともに、実爆を通じて実弾薬の取り扱い要領及び安全管理について識能の向上を図るために実施された。

本訓練にあたり実施者は、基本基礎動作の練成を模擬爆破薬等を用いて、約2週間にわたり段階的に実施した。

実爆訓練当日は不発弾の危険性を認識し、基本基礎動作を確行して真剣に取り組み、弾薬特技者としての技能を維持させることができた。

導爆線と雷管を接続する隊員

東部方面混成団

未来を担う学生が羽ばたく
初級陸曹特技課程が修了

4月8日から第3陸曹教育隊で実施されていた第147期初級陸曹特技課程が6月23日に修了式を迎えた。

本課程は初級陸曹に必要な専門知識と技能を修得させるための課程であり、第1普通科教育中隊では「迫撃砲」と「ATM（対戦車ミサイル）」、第2普通科教育中隊では「軽火器」の特技に関する課程教育がそれぞれ行われた。

1普中が担任した迫撃砲課程では120mm迫撃砲RTと81mm迫撃砲に分かれて教育が行われ、観測や射撃指揮等を学ぶとともに実弾による迫撃砲射撃も行い知識・技術を修得したが、各学生は原隊では使用しない迫撃砲の操砲も体験するなど、迫撃砲に対する理解をより深めていた。

ATM課程では中距離多目的誘導弾の教育が行われ、こちらも同様に観測や射撃指揮の教育が行われた。

中距離多目的誘導弾は、東方管内では第12旅団の普通科連隊及び3曹教にのみ装備されている誘導弾であり、学生は貴重な教育の機会に真剣に取り組んでいた。

2普中の軽火器課程では普通科隊員として必要な小銃・軽機関銃の教育のみならず01式対戦車ミサイル・個人携行対戦車弾の教育なども行われた。

また塹壕内における戦闘要領など、昨今の戦闘様相や教訓などを鑑みて必要性が再認識された課目についても教育が行われ、学生の教育に取り組む姿勢は一段と真剣さを増していた。

今回の教育では約120人の若手3曹が教育入隊し全員が熱い志を胸に抱き教育を終え、各原隊に復帰していった。

3曹教は引き続き陸上自衛隊の中核たる陸曹の教育に全力を注ぎ、組織の将来を担う陸上自衛官を養成していく。

塹壕に突入する軽火器課程の隊員

120mm迫撃砲の実射を行う迫撃砲課程の隊員

轟く武山自衛太鼓

31普連の隊員で構成される武山自衛太鼓は、6月13日に実施された米国陸軍創立記念式典において太鼓演奏を実施した。本式典は例年キャンプ座間で実施されているが、今年は第250回という節目に伴い米軍施設である「ニュー山王ホテル」で行われた。

式典に相応しい全3曲の演奏（写真）を行い会場を大いに盛り上げスタンディングオベーションがおきた。

式典に参加した陸上幕僚長からは「日本の自衛隊を代表する素晴らしいパフォーマンスだった」とその迫力ある演奏への讃辞が贈られるとともに自衛太鼓の演奏が日米友好に寄与したとの功績により、演奏者全員に記念メダルが贈られた。

初めての大舞台となった若手隊員も練習の成果を発揮し、今後の武山自衛太鼓の更なる躍進に向け大きな弾みをつけた。

語学支援要員のスキル学ぶ
日本文学暗唱競技会で成果を発表

第3陸曹教育隊で実施されている初級陸曹特技課程「基礎英語」で「日本文学暗唱競技会」（写真）が開催された。

この競技会は教育入隊中の隊員が桃太郎・かちかち山・一寸法師などの日本文学作品を英訳で暗唱し、審査員である米兵や民間の英会話教室講師から発音・表現力・伝達力等の審査を受け、語学力を高めるというものだ。彼らの身振り手振りと豊かな表情を駆使した優れた表現力に、教官からは「素晴らしい。練習の成果が十二分に発揮された」と目を見張る上達を遂げた学生の語学力に感銘を受けたと語った。

本課程に教育入隊している8人の隊員は約12週間にわたる教育を通じ、語学支援要員としての資質のかん養と能力の向上を図り、将来の同盟国・同志国との連携強化における重責を担う準備を進めていく。

東部方面混成団
公式Xはこちら！
陸上自衛隊【東部方面混成団】公式
@EACB_takeyama
たくさんのフォロー
お待ちしています！
東混団
31普連
48普連
31普連
インスタ始めました！
フォローお待ちしてます！

総監部人事部募集課
募集ニュース

防衛省は7月1日から8月31日までの間、三自衛隊全国統一による採用広報施策である陸海空サマー・フレンドシップキャンペーン（通称「サマキャン」）を開催している。

本キャンペーンは自衛隊の人材確保に対する取組みを陸海空の各部隊、地本が一体的に発信することにより、話題性を作り出し、募集対象者及びその保護者等に対し、自衛隊の魅力を発信するものである。

サマキャン期間中、各地本は市街地広報として各種イベント会場及び商業施設で広報ブースを展開するとともに、部隊等は駐屯地納涼祭、部隊見学及び体験ツアー等を行い、募集対象者に自衛隊の魅力を伝えた。

総監部はサマキャンと連動したグッズを各地本、各部隊に配布することで隊員自主募集情報の獲得を図った。また総監は各地本・部隊等の激励を実施するとともに市街地広報を行った。

イベントに参加した学生からは「自衛隊は遠い存在に感じていたけれど、雰囲気が良い隊員が多く、良い印象に変わりました」との声を聞くことができた。

地本による市街地広報

部隊による市街地広報

市街地広報を行う総監

艦艇広報（護衛艦あがの）

航空機見学（厚木基地）

高校における本部長講話

中学生職場体験（富士学校）

高校演奏指導（第1音楽隊）

ジョイントトレーニング（横須賀基地）

後支隊

新隊員後期教育を開始

各職種の知識・技能を修得

後方支援隊は7月から朝霞駐屯地において、新隊員後期課程武器及び輸送教育を開始した。

教育開始式は各職種教育担任部隊により、それぞれ執り行われた。新隊員は緊張と不安を抱きながらも、元気のある力強い申告を実施して、これからの各教育に臨む姿勢と覚悟を示した。

区隊旗授与式（武器）

新隊員による申告（輸送）

武器の教育開始式では、教育担任官である第104全般支援大隊長が「学ぶことを楽しもう」を要望し、輸送の教育開始式では教育担任官である東部方面輸送隊長が「操縦とは何かを掴み取れ」「同期を大切にせよ」を要望して、それぞれの教育を開始した。

武器科新隊員68人及び輸送科新隊員等23人は、各職種の自衛官として必要な知識及び技能の修得に向け、座学など各種実習等に奮闘する。

武器科の新隊員は9月18日、輸送科の新隊員は10月22日にそれぞれの教育を修了し、部隊配属する予定である。

各教育担任部隊は新隊員が同期と互いに切磋琢磨し、絆をより一層深めながら、本教育を笑顔で修了できるよう善導していく。

シ通群

システム通信科を担う隊員育成

基礎的識能を修得

東部方面システム通信群は、7月2日から新隊員特技課程及び一般陸曹候補生課程後期57人に対する教育を開始した。

区隊旗授与式

群は本年度より教官・助教、教育施設・器材等の効率的な運用を図るため、システム通信団との教育一体化を図っており、6月9日から陸上総隊及び東部方面隊隷下の8個部隊29人の支援を受け、教育開始までの約一か月で「教授計画の作成」「教育法に基づく教育要領の練成」「数次にわたる教授予行」「教育環境の整備」を行うとともに、見積もられる不測事態・服務事案を未然に防止するため「各種教育等による周知徹底」を行い教育態勢に万全を期した。

教育担任官である群長は新隊員に対し「基本特技を確実に修得せよ」「心と身体を鍛えよ」「同期の絆を大切にせよ」の3点を、また教官・助教に対し「新隊員の個性に親身に寄り添って育成せよ」をそれぞれ要望し教育を開始した。

新隊員は隊旗授与式では、力強く隊旗を受け取り、本教育へ臨む気概をのぞかせていた。

今後、新隊員は10月中旬までシステム通信科隊員として必要な基礎的識能を修得するため、酷暑の中、同期とともに野外で心と体を磨き、教場で知識と技能を身につけ、区隊旗の下に一致団結、教育に臨むこととなる。

群は現在の厳しい募集環境の中で入隊してきた新隊員を、情熱と愛情をもって教育し、それぞれの部隊の原動力、延いてはシステム通信科の未来を担う隊員となれるよう全力で育成していく。

航空隊

「THE突破ファイル」撮影支援

水害に対する防災意識高める

航空隊は5月12日、テレビ番組「THE突破ファイル」の撮影を支援した。本番組は実際に起きた出来事をもとに、困難をどのようにして切り抜けたのかを再現ドラマで紹介するバラエティー番組である。

UH－1Jを使用した撮影の様子

今回の撮影は2015年9月に発生した、鬼怒川の堤防決壊による水害時に、倒壊寸前の家屋で助けを求める4人と、電柱に体一つでしがみつく男性を、自衛隊のヘリコプターはどのようにして救助したのかを紹介するものであった。

この水害は200年に一度と言われた集中豪雨で、堤防が決壊して大水害が起きたものであり、瞬く間に周辺地域が水没し、浸水家屋約3000棟、避難民約4300人の甚大な被害があった。

撮影当日は早朝からスタッフ・俳優が駐屯地を訪れ、担当部隊と製作者で認識統一を行い撮影に臨んだ。

撮影では住民を救助するために建物を上空から捜索しているシーン、屋上に着陸するために航空機が建物に接近・離脱するシーン、その他制作者側のニーズに応じた撮影を行った。その際、操縦士、ホイスト救助員、要救助者、安全係及び交通統制員など多くの隊員が支援を行った。

航空隊はいついかなる状況においても、任務を達成できるよう引き続き、部隊一丸となり練度向上を図っていく。

特科連隊

北富士に美しい音色響く

新編後初のらっぱ競技会

東部方面特科連隊は7月9日、北富士駐屯地において、特技保有者の練度維持・向上及び士気の高揚を目的として連隊新編以来初となる、連隊らっぱ競技会を東部方面音楽隊及び第34普通科連隊からの支援を受け実施した。

中隊対抗の部

個人の部

本競技会は中隊対抗の部、個人戦の部（3曹の部、陸士第1部（特技保有2年以上）、陸士第2部（特技保有2年未満）、2曹以上の特技保有者の部、幹部の部）で実施され、各中隊は統裁官要望事項である「正確性の重視」「らっぱ手としての誇りの堅持」「団結力の発揮」を具体化して、確立した目標に向け、計画的かつ段階的に積み上げてきた練成成果を遺憾なく発揮した。加えて各選手は独特な緊張感が漂う中、それぞれの課題曲及び抽選曲を吹奏し、中隊の威信及び個人の名誉をかけ、北富士の地に美しい音色を高らかに響かせた。

中隊対抗の部で優勝した情報中隊の仲島3曹は「日ごろの練成成果を十二分に発揮することができた」と語った。また陸士第2部において優勝した第1大隊第1中隊の竹内士長は「最高に嬉しい。指導して下さった中隊の先輩方に感謝したい」と喜びを語った。

連隊は引き続き各種競技会等を通じ、各特技の練度維持・向上を図るとともに、隊員一人一人の職務に対するやりがい及び充実感の付与並びにチャレンジ精神を涵養して士気の高揚及び部隊団結の強化を図っていく。

本競技会の成績は以下のとおり。

【中隊対抗の部】
情報中隊

【個人の部】
○3曹の部
第1大隊本部管理中隊　伊藤3曹
○陸士第1部
第1大隊第1中隊　清水士長
○陸士第2部
第1大隊第1中隊　竹内士長
○2曹以上の部
第2大隊第6中隊　石塚2曹
○幹部の部
第1大隊本部　大島2尉

訓練所感

大隊検閲に参加して

東部方面特科連隊
3等陸曹　藤井　智之

私は5月26日から29日まで実施された大隊検閲において、第5中隊第2砲班長として参加しました。今回の検閲の特性として長射程射撃、広域分散における火砲の健在の2点が主要検閲項目となりました。

長射程射撃について私の砲班には、大隊の試射を担当する基準砲として大隊の射撃に重大な影響を及ぼす任務があります。射撃準備から実弾射撃を通して、砲班員を指揮し、射撃の精度及び速度を維持する等、基準砲砲班長としての責任の重さを痛感しました。

射撃準備間は検閲における大隊長要望事項「火砲を隠せ、尻も隠せ」のもと、与えられた地域の中で特に上空からの隠蔽に着意した陣地かつ長射程射撃に耐えうる陣地の選定が求められました。ここでは、上記の2点を両立させるため、十分な偽装と、射撃を安定させるための駐鋤溝の掘開を重視しました。偽装については、地形地物を最大限活用するとともに、直接偽装を絶えず実施しました。駐鋤溝の掘開については、強装薬を使用した射撃による火砲の後退を最小限にするため、普段より深く掘開することで射撃精度の安定に努めました。しかし、射撃中に基本基礎を怠ったことにより、射撃に係る時間を要してしまい、大隊の射撃に重大な影響を与えてしまったことを痛感しました。今回の訓練で様々な経験をさせてもらいましたが、その中で改めて基準砲として他の砲班の模範となるような砲班を目指し、日々練成していく所存です。

新潟地本

ミサイル艇「うみたか」新潟柏崎港で艦艇広報

自衛隊新潟地方協力本部は5月31日・6月1日の両日、柏崎港においてミサイル艇「うみたか」の艦艇広報を実施した。海上自衛隊第2ミサイル艇隊所属のうみたかは、最大速力44ノット（約80km／h）を誇る高い機動性や即応性及び打撃力に優れた小型高速艇で、新潟に寄港するのは2年ぶりである。

うみたかについて説明を受ける参加者

両日とも募集対象者やその家族、自治体職員などに向けた特別公開と、会場に来場した見学希望者に向けた一般公開を行った。来場者は2日間合わせて約2200人に上り、雨模様で肌寒い生憎の天気であったが、終日待機列が途切れることなく大盛況であった。

乗艇を待つ間、乗組員によるらっぱ吹奏や、艦艇同士で使用される伝統的な通信手段のひとつである手旗信号、モールス信号とも呼ばれる発光信号の披露も行われ、来場者の注目を集めた。他にも、柏崎市上空に敵の飛行機が侵入したという想定で行われた主砲操法展示では、艇長自ら指揮を執り、レーダーで敵を感知しその方向へ素早く向きを変える主砲の動きに驚きの声が上がった。来場者は皆真剣な表情で展示を見守り、艇長から「柏崎上空の安全が守られました」とアナウンスが流れると、見学していた来場者から大きな拍手が起こった。

来場者は「手旗信号を目の前で見ました。旗を素早くピシッと振る姿がとてもかっこよくて印象的でした」などと、感想を話した。

新潟地本は今後も艦艇広報を通じ、志願者獲得に繋げていきたい。

茨城地本

7月1日の募集解禁に向け令和7年度出陣式を実施

拳を上げて記念撮影

自衛隊茨城地方協力本部は6月30日、令和7年度出陣式を実施した。

出陣式は7月1日の募集解禁に向けて茨城地方協力本部全隊員が一丸となって取り組むため毎年実施している。

出陣式において募集課長は「各自プラス1の気持ちを持って、2025人の志願者獲得を目指す。先日、知恵の神様を祀る神社において、募集目標達成のための知恵を授けて下さいと願をかけたので、募集施策が思いついたら、それは神様のお告げであると思ってもらいたい」と決意表明した後、勝鬨を上げた。

本部長は「各部員は執念の能動を発揮して、一所懸命にプラス1を目指し、各指揮官は鳥の目で部下をみてもらいたい。茨城地方協力本部の目標達成は、団体戦であるから、上司及び相互間でしっかり情報共有を図ってもらいたい」と訓示を述べた。

茨城地方協力本部は、これからも『能動』、『相乗』を発揮しつつ『信頼』と『循環』に努め、募集目標達成に邁進する所存である。

栃木地本

海自厚木航空基地でP－3Cの体験搭乗

自衛隊栃木地方協力本部は7月5日、海上自衛隊厚木航空基地で募集対象者等20人に対し哨戒機P－3C体験搭乗を行った。

当日は夏らしい晴天に恵まれ絶好の体験搭乗日和となった。米海軍と共同施設の海上自衛隊厚木航空基地へ到着すると、正門の受付は米海軍の隊員等が行っており、参加者たちは早くも異国情緒あふれる体験に期待に胸が大きく膨らんでいた。米軍基地内のフードコートで昼食を取ると、英語のメニューやドルで返ってくるお釣りなどに「プチ海外旅行」の気分を味わうことができた。米軍基地内を通り抜け、部隊へ到着するとP－3Cの任務についてのブリーフィングの後、最初に搭乗する10人にドックタグやイヤーマフが配られ、体験搭乗に向かった。搭乗待ちのグループにはP－1の見学が行われ、操縦席に交代で座り、各機材の説明を受けていた。

パイロットから説明を受ける参加者

P－3Cの前で記念撮影

参加した高校生は「海上自衛官になりたいと考えているので、今回の体験搭乗ではとても貴重な体験ができた。現役パイロットの話しが聞けたのも、とても参考になった」と笑顔で話してくれた。

栃木地本は今後も各種イベントを通じ、自衛隊への理解の促進を図るとともに募集活動を推進していく。

静岡地本

サマキャンの一環としてサテライトブースを開設

自衛隊静岡地方協力本部は7月1日、ペガサート1階（静岡市）に静岡募集案内所のサテライトブースを開設した。

これは陸海空自衛隊サマー・フレンドシップキャンペーンの一環として行ったもの。近くに複数の学校があり、駅や商業施設に隣接している立地を生かして、若者や保護者が入りやすいカフェテラス風を目指した。開設は7月31日まで。

ブースには偵察用オートバイ、試着用制服や迷彩服、自衛隊紹介動画、触れる南極の氷、自衛隊の職種や働く自衛官の声を紹介するパネルなどを展示。明るい雰囲気のカフェテーブルや観葉植物を設置したほか、城南静岡高校地域貢献部と協力してフォトスポットの作製や室内の装飾を行った。

ゆっくりくつろぎながら自衛隊を知ってほしいとの思いから、フリーWi-Fiや無料の飲み物、アイスも用意、初日は近隣の学校に通う中高生や親子連れなどが訪れた。

広報官から説明を聞く中高生

カフェテラス風のサテライトブース

静岡所の自衛官や自衛官募集相談員等の協力者が来場者を出迎え、展示品の説明や案内などを行った。

来場者の中には「学校で防災講話をしてくれた人だ」と自衛官の顔を覚えている生徒もおり、南極の氷に触れたり迷彩服を試着したりして、友達と楽しみながら自衛隊への理解を深めていた。

静岡地本は今後も地域との繋がりを深め、自衛隊の活動を知ってもらえるよう広報活動を行っていく。

神奈川地本

自衛官に聞く仕事のリアル高校生から職業インタビュー

自衛隊神奈川地方協力本部市ヶ尾募集案内所は6月12日、神奈川県立田奈高等学校において行われた「職業インタビュー」に参加した。

自衛隊の仕事について話す広報官

この行事は同校1年生が「総合的な探求の時間」の一環として実施しているキャリア学習で、生徒が関心のある職業人に直接インタビューを行い、働くことの意義や、やりがい、仕事内容への理解を深めることを目的とし、当日は自衛隊を含む複数の職業が紹介された。

自衛官との対話を希望した生徒は、「なぜ自衛隊に入隊したのですか？」「休みはどれくらいあるのですか？」「仕事のやりがいは？」「自衛隊を仕事にしてよかったことは？」など積極的に質問し、広報官はその質問に一つ一つ丁寧に答え、自衛隊の任務や生活、やりがいについて分かりやすく説明していた。

インタビューでは制服姿の広報官に「かっこいい！」と声が上がる場面もあり、終始和やかで活気のある雰囲気に包まれた。中には自衛隊の仕事に、より関心を持つようになった生徒の姿も見られた。

市ヶ尾募集案内所は今後も、地域や学校との連携を図り、自衛隊という職業への理解を深めていただける機会を提供していきたい。

最先任上級曹長

「練磨無限」

東部方面特科連隊

松島 定好 准陸尉

令和6年12月16日付で、第2代東部方面特科連隊最先任上級曹長兼ねて第7代北富士駐屯地最先任上級曹長に上番しました松島准尉です。

東部方面特科連隊は令和5年3月に北富駐屯地に所在する第1特科隊と宇都宮駐屯地に所在する第12特科隊を統合して新編された連隊です。その任務は方面隊唯一の特科部隊として方面隊の作戦戦闘に最大限に寄与することにあります。

部隊の配置としては、北富士駐屯地に連隊本部と直轄中隊及び第1大隊、宇都宮駐屯地に第2大隊と情報中隊の一部である第2情報小隊がそれぞれ分かれて駐屯しており、更に連隊本部のある北富士駐屯地は日本一標高の高い駐屯地であるとともに雄大な富士山の麓に位置しています。また特科部隊で唯一無二の礼砲部隊であり、国賓などが来日する際や国家的行事において礼砲を実施しています。

題名の「練磨無限」についてですが、私が上番時から大切にしている言葉です。2つの部隊が1つになることはとても困難なことと考えており、別々の部隊が1つになるためには、相互に理解を深め協力や競い合うことにより、お互いの良いところを吸収し練磨をすることによって別々であった部隊がやがて1つになり足腰が強く何事にも負けない部隊を育成することができると思います。そのためには各訓練や競技会などの場を活用し部隊間の交流を深めるとともに、自ら現場等に足を運び隊員の意見を聞き、今部隊に何が必要であるかを見定めながら足腰が強く何事にも負けない方面隊唯一の特科部隊を育成していきたいと思い「練磨無限」の言葉を掲げ勤務に邁進していきたいと考えております。

これからも自ら何事においても「練磨無限」の精神で精進していきます。

フェアレディー

「不撓不屈」

第12後方支援隊

渡邊 貴惠 陸士長

今月のフェアレディーは、松本駐屯地に所在する第12後方支援隊第2整備中隊第2普通科直接支援小隊の渡邊士長です。

渡邊士長は令和4年に入隊、絵を描くことと体を動かすことが大好きな山梨県富士吉田市出身の26歳です。

Q 自衛隊に入隊したきっかけは?

小さい頃に駐屯地で働く父の姿を見て自衛隊に興味を持ちました。その後に自衛隊の仕事を詳しく知り、国を守り誰かを支えること、笑顔を守るところに魅力を感じ、入隊を決意しました。

Q 現在の職務とその職種を希望した理由は?

職種は武器科です。前期教育時の説明を聞いて後方支援業務に携わりたいと思い、表に出ない努力が大きな成果につながることに魅力を感じたからです。現在は装輪車整備員として勤務しています。人の命を預かるとても責任のある仕事なので、安全確実に作業をするよう心掛けています。

Q 休日の過ごし方は?

同期と出かけることが多いです。一緒にご飯を食べたり、買い物に行ったりしています。絵を描くことが好きなので、一日中絵を描いている日もあります。

Q 今後の目標は?

7月1日付で陸曹候補生に指定されました。陸曹になった後の目標として、スキー指導官になりたいという目標があります。スキーは幼少から続けていた好きなスポーツなのでその情熱を生かし自衛隊のスキーを通じて多くの隊員にスキーの魅力を伝え、積雪地のエキスパートとして部隊に貢献できるように、不撓不屈の精神で続けていきたいです。

東方男児

「笑顔で楽しく」

第1施設大隊

吉田 陽向 陸士長

今月の東方男児は災害派遣で懸命に活動する自衛官の姿と元自衛官である兄への憧れがあり「兄の背中を追いかけて、自分もこの道を選びました」と穏やかな口調で語る吉田士長です。

Q 現在の職種は?

自分の職種は施設科です。施設器材って種類が本当に多くて、そういうものを使って国を支えていけるというところに惹かれました。縁の下の力持ちみたいな感じですけど、それがすごく格好いいなって思い、自分で希望しました。

Q 思い出に残っている訓練は?

一番思い出に残ってる訓練は漕舟訓練です。正直、とてもキツかったです。体力的にも精神的にもギリギリでしたけど、達成感やみんなで力を合わせた一体感がすごく印象に残ってます。こういう経験は自衛隊でなければ、なかなかできないことですから。

Q モットーは?

「明るく元気に、辛い時こそ元気に」という言葉です。部隊ではしんどいこともありますが、そんなときこそ自分が明るくいることで、周りの雰囲気が良くなります。特に後輩たちにとっては、働きやすさにもつながると思うので常に意識しています。

Q 趣味は?

サッカーと野球観戦、それに音楽鑑賞です。サッカーは小さい頃からずっとしていたので、今でも大好きですし、野球は親が阪神ファンで物心ついた頃から一緒に観ていました。自然とタイガース推しになりました。音楽は高校のときにK-POPにハマって、今でも曲を聴いたりライブ行ったりしてリフレッシュしてます!

Q 今後の目標は?

陸曹候補生試験に合格して、教育隊や施設学校でしっかり技術と知識を身につけて、もっと部隊に貢献できるようになること。最終的には、国の役に立てる立派な陸曹になりたいです。

予備自衛官

静岡地方協力本部

予備2等陸曹 川上 茉美

私は平成24年3月に入隊、東部方面衛生隊で勤務し平成26年任期満了で退職しました。予備自衛官になったきっかけは上司の勧めでした。育児しながらの訓練出頭は難しいと夫に相談したところ「あなたの専門性は有事の際に絶対に役に立つ」という言葉に背中を押され、少しでも自衛隊の役にたてることがあるならと志願しました。予備自衛官になってから2度出産し任期継続をするか悩みました。しかし、予備自衛官にも産休・育休制度が整っていたり、子供が熱を出して出頭できなかった時には訓練の再調整をして頂いたりで、今まで継続することができました。

現在は浜松市のレディースクリニックで産婦人科の臨床検査技師として勤務しています。「思春期から老年期までのあらゆる女性の健康のサポート」を合言葉にチーム医療に力を入れています。仲間と協力してひとつのことをやり遂げるところは、自衛隊と共通していて当時の経験が今、生かせていると思います。また院長や同僚も自衛隊に好意的で訓練出頭時は快く送り出してくれることにとても感謝しています。

訓練期間は短いですが、密度が高く責任感を新たにする機会になっています。自衛官として基礎技能の維持はもちろん、訓練担当部隊から時代に合わせた新しい訓練を学べるので刺激的です。また職務訓練では駐屯地の臨床検査係の恒常業務や検査内容の実務を交えながら学び、実際に招集された際の仕事をイメージすることと、求められている技能や知識を再確認できました。私の専門分野である臨床検査技師としての知識と経験で、医療支援時は最大限の貢献をしたいと思います。

仕事と子育てをしながら出頭することは正直、簡単ではありません。子供に少ならず寂しい思いをさせたかもしれません。それでも、訓練に真剣に取り組む姿勢を見せることで子供は母が社会の役にたっていると誇りに感じてくれているようです。子供の将来の夢の中のひとつに『自衛官』が入っていることがとても嬉しく思います。

私にとって予備自衛官とは、誰かの役にたてるやりがいを与えてくれるものです。予備自衛官としての誇りを持ちこれからも訓練を通じて成長し自衛隊・社会・家族に恩返ししていきたいです。

編集後記

育児休業が3年取得できるようになったばかりのころ、同僚が異動先において育児休業中の部下隊員から、次の産前休暇の報告と育児休業取得の申し出を受けた話を聞きました。おそらく前の上司には次の妊娠が分かった時点で報告していたと思いますが、今までの経緯を全く知らない上司に対し、意思表示をしなければならない心理的負担はかなり大きいものであったと推測します。復職する際はその上司どころか同僚もほとんど知った顔はいなくなるのを想像するとなおさらです。当時は育児休業における勤務時間は救済処置として半分勤務扱い(退職金、勤評等に影響)され、育児休業中(無給)は共済の引き落としができないため貯金を崩しての処置等金銭面での負担、同僚への業務負担を考えると3年に延長されても大半は約1年での復職を考えていたように思います。そのうち男性も育児休業が取得できるようにはなったけれど、なかなか浸透せず、実際、科長職であった妻が産後休暇後すぐに復職し、当時中隊長であった夫が保育園入所までの1か月間、「自らが前例となる」と育児休業を取得したのが初の事例であったかと記憶します。

令和5年度、男性隊員の育児休業取得率は25・2%と一見低く見えますが、女性隊員の取得率が高ければ夫婦間での育児に係る女性の割合が未だ大きいのではと推測します。女性を区別しなければならないお産や母体保護に係ることと異なり、育児は男女どちらでもできることなので「育児は女性」という固定観念を払しょくして夫婦間で一番良い育児割合を話し合っているのであれば目標を設定する必要はもうないのかもしれません。